

退一問ニ増加シテ然ル可ク
目下ノ要件ハ以上列記スル所ノ一二ニ止マルニ非ス
例ハ在魯公使館用ノ書記生ヲ増員シテ專門學科ニ
精シキ人ヲ採用シ内地旅行等ノ際ニ學問上ノ發明
ヲ得ルニ當リニテモ多クナラシムル可ク我
國ハ其ノ利益ヲ得ルニ少ナクナルナリ

○二島公使館見 國本等嶋上野三公使に日本日御暇乞
として参内見舞得られたり又嶋上野三公使の來
る廿二日島館の警備もしが便船の都合によりて廿六
日横濱發の米國郵船にて出發と定められ上野公使
も一應米國に歸られし上任所濱田へ返るる符にし
て板垣後藤今村の三君も同船さるゝといふ

○開院宮 同宮に就いて幼年生徒として陸軍士官學
校へ編入學中としテ今回更ニ兵學研究の爲め佛國
へ醫學の修を出國せられ許可を得らるゝといふ不日渡
歐歐歐ありといふ

○伊藤公使 目下獨逸國滞在の伊藤公使の病氣の
よし日本二三の新聞に見えたるが我輩の聞く處よ
り左より事ならず近頃獨逸政府への歐洲より右様の報知
更ニ無し併し新聞も記しある事ゆゑ或ハ事實も
測られずとの注意より其筋よて三四日前獨逸青木公
使の許へ電報よて同合とされ未だ返答電報のあられ
ども必キ無根の風説あるべしと云ふ

○大木司法卿 同卿よの故の齋開明を慕はるゝにや
齋の眞實花と愛せられ毎年拵菊の花壇等を設けられ
じ日本には第一層地壇しをせらるゝよしにて昨今類
々地壇中よて花壇の頃の頃には貴顯の方々をも招
きしられ御前次宴を催はさるゝといふ

○陸軍士官學校 同君に陸軍士官三十余名と共に
一昨日午前八時二十分新橋發の流車よて横濱射的場
へ赴ひられたるよし

○大山陸軍卿 同君には一昨日午前九時頃岩倉右府
の邸に於て被刺御用候の後同邸より直に陸軍省
場へ歸せられたるよし

○近日常行せらるゝ 付在東京交詢社員の有志
十名一昨日午後五時より明治會堂にて別館を開
き同席に於て電車上讀覽ありて同君も今回洋行の
消息を尋ねし事ありし最盛なる會よてありしと
○馬車道 十七日午前九時廿五分在馬車道本社特
別館開き左の電報到達せり

○馬車道 十七日午前九時廿五分在馬車道本社特
別館開き左の電報到達せり

又支武丸も井上國會議員を引續き入關したるよし
○京城花房公使の報知 一昨十六日午後和歌浦丸は
高崎少將を搭乗し仁川より馬關へ着引續き支武丸
も井上國會議員にて仁川より馬關へ歸着花房公使よ
り公信の趣の委細電報を以て政府へ上申にありたる
よしなるが其大要ありとて我輩の漏聞したる所左の
如し

九月七日花房公使漢陽府に入り朝鮮政府と充分談判
の末九名の犯罪人を捕縛せしめより内四名は堀本中
尉の身体并我公使館を襲し害を加へたる主謀者と
定められて死罪に處せられたり一名は病死し二名の
沈罪に處せられたり外一名は王宮に對する罪人され
之我公使館に於て何の關係もあらず者あり今一名は我も同意
して無罪と定めたり九月十一日ボカカンの前にて我
官吏も臨席し朝鮮國法を照らし罰しより

八月廿八日に於て朝鮮政府と支那兵の手を藉り十一
名の罪人を捕縛して之を罰したり其内六名は公使館
を襲ひ且つ花房公使の一行を仁川府まで追ひたる者
共なり依て我に對したる罪人は合計十二名なり
花房公使は於ての暴徒は所置前述の如くにて最早滿
足ありと信じ此上暴徒を捕縛し之を罰するよし止
めたり併し外國人との交誼を益親密ならしめ且つ洋
夷侵犯云々の石碑を取除くよとを全國中に普く嚴令
すへきことを公使が朝鮮政府に忠告しより此忠告を
違からず採用することと思はる

特使節は多分花房公使と同道近日渡來するよとな
らん
九月三日附の書翰を以て馬建忠の今回の罪人を捕縛
するよと并償金の備條を容易よし且つ輕減せんよ
とを内密に花房公使に請ひたれども公使は馬建忠と
之談判を開かさざりし馬建忠は九月四日天津へ向け
出發えたり再び渡韓するや否は分らざる相事夏及び金
宏集とも馬建忠と同行しより

○朝鮮元山通信 八月卅一日附朝鮮元山津より郵便
の略よ云く皆港商業の目下休業同様居留人の便船毎
に運々減少甚だ淋しき事あり去る十九日千歳丸馬
關より釜山を経て入港白米百五十俵と酒八十挺積來
り翌廿日居留日本人十六名と京城の變を被戮された
りと云ひし尹雄烈と外二名李秉春李春植を載せ直に
出港しより○去る廿一日英國軍艦一艘函館より浦潮
灣を経て入港えたる廿廿四日浦潮灣より同國軍艦九
艘一時に來着し盛あるとありし我輩居留人は敵國の
國中よ居て唯一艘の軍艦を杖とも枉とも顧み居ると
其れ至極と云ふべし英艦隊の來港の探報の爲めあり

と申せども様子傳聞の爲め來りた
茶船を千回渡り見送せらるゝ必
り徳源府伯の我輩事關諸君が
を過ぎたれども未だ尋問の趣を
一日英國軍艦の入港を聞て倉皇居
尋問し序あから我輩事關も立寄
は英國軍艦へ一艦毎に屠牛二頭つ
りより然るに我軍艦を費まぐり決
たるよと云く我軍艦が過日再
同を爲さるありられ引替へ我國
千代田艦を贈物するよとて過日來
とのこと新聞に見えたるが是と振
積み夜具を贈るの類あるべし英軍
を昨三十日午後二時釜山へ向け出
泊中の居留地も甚だ賑はく上陸
本人と爭論したるよとありされど
くりし云々

○左宗棠計畧 此程支那に留れ
の許へ達したる來翰を先頃大院君
捕へられて支那に護送されたる
臆測を過し或は馬建忠の策ありと
指彈に出きたると云ふ者あれど決
策に於て又李鴻章の指揮に依る
宗棠の計畧に成りたる者なり其故
變に頃に當りては母喪に在りて
命を傳ふるの暇なきをあらせ元
境土の廣濶を過ぐるより邊隅に住
よ對し不運の舉動を爲し往々支那
るを憂へ専ら内地の鎮撫に力を竭
に朝鮮の内政を強て立入るの意を
宗棠と兼て武人の名ありて只管支
とを務む故に今回大院君を支那
るの左氏に於て馬氏に此旨を傳へ
るが如し云々とありたるよし

○魚形水雷火 我海軍省よて水
雷火の魚形水雷火を艦隊に備へ
聞へある魚形水雷火を艦隊に備へ
數拾箇を注文せられ備其使用法
中ある由且過日同省出仕若山銜吉
氏は會てより此魚形水雷火の構造
該製造法を習熟し歸朝の上り我國
る積りある哉の由兎に角我海軍
しきことによと

○在朝鮮士官 此報の朝鮮事變
行せし海軍大佐藤林中尉第二